

研究主題 不登校対応～校内や外部関係機関と連携を図った協働体制の構築に関する教頭としての関わり

西臼杵支部 日之影町立日之影小学校 森本 健一

1 主題設定の理由

本校には、3年生の後半から登校できなくなった児童がいる。令和4年度、欠席日数61（授業日数128）。令和5年度、欠席日数198（授業日数206）。家庭訪問や電話連絡をしてもなかなかつながらず、安否確認さえもままならない状況にあった。

そこで、登校できることを目標とせず、「児童と学校がつながる」「保護者と学校がつながる」ことを目指し、支援の在り方について教頭としてどのように進めていくか組織的な対応について模索することとした。

2 研究のねらい

長期不登校状態にある児童と保護者を孤立させることなく、また担任が一人で抱え込むことがないようにチームワークを活かした校内支援体制作りと外部関係機関との連携を通して、「つながる支援」を実現していくために教頭としての役割を明らかにする。

3 研究の概要と成果

(1) 研究の内容

- ① アセスメント→課題の明確化
- ② 校内支援体制の整備
- ③ 外部関係機関との連絡調整
- ④ タブレット端末を活用した取組
- ⑤ 学校復帰に向けて

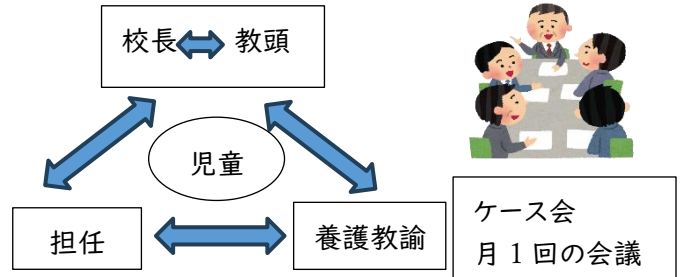
(2) 研究の実際

① アセスメント

不登校に至った要因や背景、児童の心理、保護者、家庭状況について実態を把握し、家庭に寄り添う支援の在り方について共通理解を図った。

② 校内支援体制の構築

関係職員でケース会を開き、組織的な対応を検討。これまでの情報やアセスメントをもとに、今後の方向性や目標を関係職員で確認し役割分担を行った。



ア ケース会

第1回のケース会で、タブレットを活用し担任、養護教諭、教頭のいずれかが児童とオンラインでつなぎ、顔を見て話すことを決定した。時間帯については、10時、12時、14時と設定し実施していった。しかし、途中経過を見ていくと様々な事情により、午後しかつながらないことが多くなったため、第2回のケース会を開き、15時30分の時間帯にしばることとした。

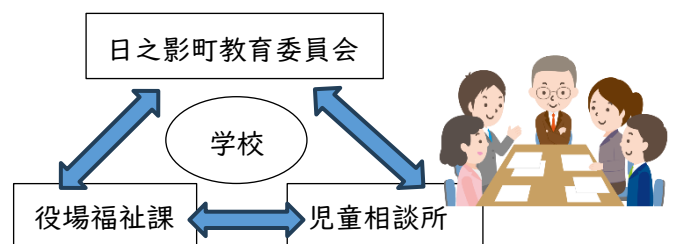
イ 生徒指導・不登校対策委員会

月1回実施している会の中で、児童の状況、対応について学校全体で情報を共有した。

③ 外部関係機関との連携・連絡調整

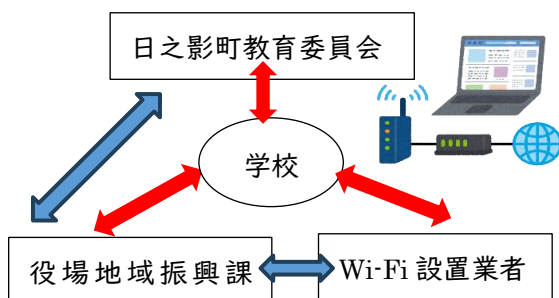
ア 関係機関とのケース会

4月20日、7月19日と10月12日、日之影町役場において、教育委員会、児童相談所、町民福祉課、本校管理職2名が参加しケース会を実施。資料をもとにこれまでの経過と現状を説明し、情報の共有を図った。その後、児童や保護者への関わり方、保護者による関係機関への相談等について、実現可能な支援方法を考え、支援の役割を分担した。実際、学校と情報を共有することで、福祉課の方にも家庭訪問を行ってもらい、保護者や本人と話すことで、家庭状況を把握してもらった。



イ Wi-Fi環境設置

タブレット端末を活用した取組を始めるにあたり、Wi-Fi環境を確認したところ未接続だったため、日之影町役場地域振興課に依頼してWi-Fiを設置してもらった。保護者とのやり取りに時間を費やしたものの、設置に至るまで教育委員会→役場地域振興課→業者→学校の連携がスムーズかつスピーディに行われ設置にこぎつけることができた。



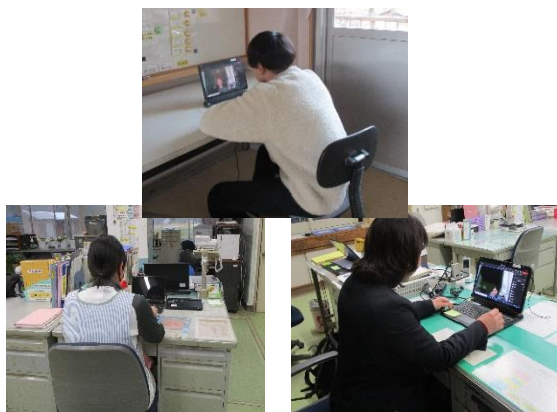
④ タブレット端末を活用した取組

ア オンライン面談

決められた時間に、担任、教護教諭、教頭が面談を実施。主な内容は、健康観察、家庭の様子を把握、学校の情報を伝える等

イ オンライン授業（非参加型）

帰りの会や国語、体育の授業を配信し、学習の様子や子ども達の様子を短時間見る機会を時間設定した。



⑤ 学校復帰に向けて

ア 職員へ共通理解

不登校児童生徒への支援は、「学校に登校する」という結果のみを目標にするのではなく、焦らず急がず、まずは、つながることを大切にして取り組むことを共通理解し進めていった。

イ 保護者との連携

本人の今後を考え、保護者対応を学校があきらめず、粘り強くアプローチし続け、関わりを切らない支援を行っていった。また、困難な家庭状況を受け入れ理解した上で、家庭に寄り添う支援を行い、オンラインだけのやり取りにとどまらず、定期的に家庭訪問も実施し、週末は、学校へプリントを取りに来てもらうこともあった。

ウ 学びたいと思った時に学べる環境整備

不登校の児童が学ぶ機会を確保するために、学びたいと思った時に学べる環境を整えた。まず、親子登校や登校可能な時間による登校、夕方来校も受け入れた。そして、自分のペースで学習できるよう、落ち着いた空間（教室）を親子に提供。教室で授業を受けた後、保護者と一緒に別室で過ごし、また、教室へ戻っていくこともあった。

(3) 研究の成果

- 先の見えない課題に対して、新たな方法でチャレンジしていく学校、その取組により学校が組織体として機能し、オンラインで学校と子どもをつなぐことができた。
- 子ども自身がつながりたいという思いと保護者の理解もあって継続的に実施することができた。
- 2学期から始めたオンラインの取組結果

※ 登校 8日

月	オンライン面談（回数）
9月	9回
10月	10回
11月	13回
12月	12回
1月	12回
2月	10回
3月	13回

※ 電話連絡、定期的に家庭訪問も実施。

4 今後の課題

家庭環境や保護者の養育力に大きな課題が見られる場合、関係機関と連携しても保護者の考え方が変わらない限り、改善することが困難である。